

第4分科会 「女性たちの仕事おこしと協同」をふりかえって

関戸 美恵子 (ワーカーズエクラ・実行委員)

河合 満喜子 (愛知高齢者事業団・座長)

内山 哲朗 (工学院大学・座長)

(1) 新たに《女性》の視点を加えて《協同》の可能性を掘り下げること、換言すれば、《女性》の社会的な存在規定をふまえ、《女性》の視点から《協同》を問い直すと同時に《協同》の意義と可能性を《女性》の視点のなかにも組み込むための交流にすること——以上を基本テーマに全国協同集会としてははじめて「女性たちの仕事おこしと協同」分科会が開催された。協同集会に先行して6月に開催された「神奈川ワーカーズコープ研究交流集会」での成果をも受け継ぐかたちで、《女性》の視点と《協同》の視点を接合すべくはじめて全国レベルでの交流が実現したことの意義はきわめて大きいものであったといえてよいであろう。

分科会の構成はつぎのようであった。

【報告①】伊東和代 (神奈川／ワーカーズコレクティブにんじん) : ワーカーズコレクティブの草分け的存在である〈にんじん〉の経過と「食べていけるワーカーズへの展開」の試みについて。

【報告②】田窪恵子 (兵庫／企業組合ヘルプ協会) : 中高年事業団から発展した女性を中心とする家事援助・介護サービス・ヘルプ事業の実践の経過とヘルプ事業を職業として社会的に位置づけるための苦闘について。

【報告③】村山節子 (神奈川／ワーカーズコープキュービック) : 生協活動・職業経験・「主婦」経験を活かした仕事おこしとそれを継続させるための集団として進めている自己教育の実践について。

【報告④】藤森文江 (静岡／有限会社ふれあい) : 農協婦人部のメンバーによる仕事おこし・地域おこしの実践について。野菜の朝市からはじまり、よもぎ饅頭の製造販売へといたる経過について

「仲間づくり」の大切さを中心に報告。

【報告⑤】関戸美恵子 (愛知／ワーカーズエクラ) : 女性の起業サポートシステムづくりのための講座開設の経験と社会が必要とする事業・働きのいのある仕事のための「市場」づくりとそのための経営指導について。

【コメント】①井之川平等 (コープかながわ) / ②小川泰子 (神奈川ワーカーズコレクティブ連合会) / ③佐藤和夫 (千葉大学)

(2) 女性たちの背負うさまざまな歴史的社会的な制約条件が厳然と存在するも、一般に「女性と仕事」の問題は相変わらず古くて新しい問題ではある。しかしながら、《女性の仕事おこし》と《協同の仕事おこし》を二重写しにするという今回の試みのなかで、女性たちがみずから取り巻く環境条件の違いを越えて《仕事おこし=起業》にさまざまな立ち向かっている様子があらためて浮き彫りにされたことは、本分科会設定の意図がまずは成功したことを表現するものだといえるのではなかろうか。すなわち、理念に対して原則的・意識的に仕事おこしに取り組むグループ、女性が社会的に「負」の存在とされていることを逆手にとってしたたかに事業を営む女性たち、生活者としてのみずからの願いの実現と重ねて仕事おこしを発想するグループ等々じつに多彩で多様な参加が得られたことが分科会開催のさしあたりの成功を証明している。

ワーカーズコレクティブ、労働者協同組合、ワーカーズコープ、農村における女性の起業、女性の起業サポートをより幅広くネットワークに結ぶ試み等個性豊かな充実した報告にも恵まれ、「女性たちの仕事おこしと協同」にかかわる総体的な



構図をかなりの程度正確に反映させることができたのではないと思われる。そして何よりも率直で真摯な本音の報告が参加者に与えたであろうインパクトの強さは特筆しておかなければならない。分科会会場に波打った興味・関心・共感・共鳴、そして爆笑の渦……それらが「女性たちの仕事おこしと協同」をめぐる議論の一層の必要性を雄弁に物語っていた。こうして、「女性たちの仕事おこしと協同」をテーマとするはじめての全国交流集会という点に鑑みれば、相互に存在を確認しあい、相互に現時点での実態を率直に交流しあうことができたことで第一段階としての役割は果たせたといえそうである。

(3) 分科会での熱気を伝えるために、参加者から寄せられた数多くの感想文のなかからその一部を抜粋して若干紹介しておきたい。

①「『女性』ということにあまりこだわっていなかったが、『女性』という枠からの発想もまたひとつの切り口なのだと思います。発意や熱意からはじまって、現実から理論化し政策的にも深めていこうとする多くの女性たちに敬意を表したい。『女性の銀行』というのは良いと思う。また、女性という枠だけでない起業＝仕事おこしのための支援機構が日本の資本主義社会のなかではとても大切なのだと思います。女性たちのホンネによる報告・発言はとてもよかった。」

②「生き生きとした女性たちの姿はほんとうに未来に希望を抱かせるものでした。しかし他面では、仕事として本格化していく際に、これまでは

表に見えにくかった課題も次第に明確になってきたように思います。また、分科会を通じて女性にとっての『新しい働き方』の性格も明確になったと思います。『新しい働き方』のための労働の改革が生活様式全体の変革めきにはありえないことがよくわかりました。」

③「私はフェミニズム・女性学を学ぶなかで、人にとって働くことは当然の権利ということを実感し、3年前からパート労働に就きました。しかし、雇われて働くこと以外の働き方があるのではないかと思い、自分のやりたい興味のある分野で何か仕事ができないかと模索しています。協同についてはあまり知識がなかったので入門として参加させていただきました。元気のない私は元気印の女性たちに圧倒されてますます元気がなくなりそうではありますが、ヒントはいっぱいいただきました。『食べる仕事』『100万円の壁』についてはもっと議論をして欲しかった。」

④「第4分科会に参加して、雇用されるのではなく、主体性をもって働くことを求めている女性たちが自分のほんとうに身近なところに存在していることを知った。仕事をもち家庭をもち、協同労働を通じて葛藤しながら頑張っている女性たちの連帯がもっと広がり、もっと深まっていくことを期待しています。これを期に、ぜひ女性の集会というかたちで交流がもてたらと感じました。」

⑤「実際に起業していらっしゃる方々のお話はやはりお話自体おもしろく、かつ何より今までのご苦労が伝わるのと同時に、自分の足で確実に踏張ってきた充実感がよく伝わってきました。帰りがけに『がんばろうネ』の声が部屋のあちこちから聞こえてきました。たいへん有意義な会だったのではないのでしょうか。勉強になりました。」

⑥「私たちの仕事の場をみんなで創り出してきた日本労働者協同組合でも、半数以上が女性であり、組織の重要な部分も実際に担っています。労協で働く女性たちは、仕事をするなかで性別を特に意識することもなく、一人の人間として仕事に携わってきたと思っています。それは、労協を生まだし成長させてきたリーダーや先輩たちが長年

の労働運動で研鑽を積み、その経験のうえに始めた事業であるから、女性であることに大きな不都合をあまり感じないままきてしまったからです。しかし、仕事をするうえで性別役割分担の固定化が常識となっている社会構造のなかで、その矛盾・不平等に最初にぶつかるのは責任ある仕事についている女性たちであること、これは、発言を聞きながら感じた実感でした。今回の分科会によって女性問題の重要性を再認識するとともに、社会の仕組みや経済の仕組みを変えていくために女性の視点が据えられようとしている現実にも力強さを感じます。私は、この分科会に参加して、仕事おこしと仲間づくりの協同の重要性、そして女性も男性も仕事と家庭の両立が可能となるような社会の仕組みの必要性をあらためて痛感しているところです。50年前の女性参政権獲得の時期のことを思えば、まだ多くの課題を抱えてはいますが、『女性たちの仕事おこしと協同』の取り組みには可能性に満ちた展望が広がっているのだと思います。

(4) 以上を十分にふまえたうえで、今後とも「女性たちの仕事おこしと協同」をテーマに集会を重ねていくとすれば、いくつかの留意も必要とされるように思われる。

第一に、現代社会のなかに依然として根強く存在する「女性問題」への認識をめぐって準備段階からの議論を十分に重ねておくことの必要性である。現実が企業社会の支配的価値観に覆われているなか、企業社会というシステムがあるいは制度としてあるいは意識として「女性差別」を温存する状況が続いているが、それゆえに女性たちのなかに堆積しているエネルギーもそれだけ大きいものがあるであろう。今回、『協同』の視点に『女性』の視点を加えることで、協同運動の外縁には豊かな裾野が広がっていることがあらためて示されたのであるが、『協同』を軸とするさまざまな取り組みが一層幅を広げ、同時に一層質を高めることによって社会経済システムの構造転換に貢献しようとするとき、現実社会のなかでの「女性問

題」の存在への十分な認識は不可欠な課題になると考えられる。その意味で、社会経済システムの転換とも関連して、『協同』と『女性』の接合は、実践的にも理論的にもやっと緒についたところだといふべきであろう。

第二に、「女性たちの仕事おこしと協同」の経験もいまだ「点」でしかないのであって、それを、「点」から「線」へ、「線」から「面」へと発展させていくためには、労働者協同組合・ワーカーズコレクティブ・ワーカーズコープにおける事業の性格・運動の方向性・組織のあり方（メンバー間の合意形成、リーダーシップのあり方）、それらにふさわしい経営手法の開発等々をめぐる実践的な検討が必要とされる。こうした自前の事業体としての集団的能力の整備とともに、さらには他の協同組合との関係のあり方も広範な議論のなかで煮詰めていく必要があるだろう。女性たちにとっての新しい時代を創造するためにも、これまでの多様な仕事おこしの経験をしなやかに交流しつつ幅ひろい「仕事おこしと協同のネットワーク」の形成へと繋げていくことが急務である。

いずれにせよ、「女性たちの仕事おこしと協同」への取り組みはいま始まったばかりである。今集会の出発点としての成功を足がかりに、今後とも幅広く、ねばり強く『協同』と『女性』を実践的に結合させようとするシステムづくりのために継続的な努力を続けていきたいものである。